

SDM研究科シンポジウム

「ポスト・コロナ時代にどう臨むのか」

—安全保障世界のパラダイムシフト—

21世紀に入ると、9・11同時多発テロ、フクシマ原発事故、そして今回のコロナ禍と未曾有の災厄が相次いでいます。これらの凶事を境にわれわれが暮す世界は様相を一変させてしまいました。超大国を襲った航空機の自爆テロルは「テロの世紀」の幕を開け、フクシマの惨事は「原子力こそ最も安価でクリーンなエネルギー」という神話を葬り去りました。そしていま、新型コロナウイルスは人類の社会・経済システムに痛打を浴びせつつあります。

想定を超える事態に備えておけ——。安全保障の要諦とは、この一語に尽きるのですが、コロナ禍でもまたわれわれは未知の災厄への備えを怠ってしまいました。今回の「SDM特別講義」では、社会の一線で活躍するSDM修了生にも参加してもらい、幾多の人

命を奪ったウイルス禍が、現代社会のシステムにいかなる打撃を与え、人々はどのようにこの試練に立ち向かっているのか、現場の報告を交えて考えてみたいと思います。

新型コロナウイルスは、二〇一九年の暮れ、中国の武漢で発生し、瞬く間に猛威を振るい始めました。しかし、WHOも各国政府も迅速な防疫対応をとれませんでした。強権体制下にある中国が、情報を統制してしまったからです。加えて、有効な治療薬もワクチンを持ち合わせおらず、都市を、そして国境を封鎖して、防疫の壁を築く十分な術も持ち合わせていませんでした。

「インテリジェンス」とは、国家が生き残るための選り抜かれた情報です。国家の舵取りを委ねられた政治指導者は、彫琢し抜かれ、分析し抜かれた「インテリジェンス」を抛り所に、国家の針路を定めていかなければなりません。しかし、コロナ禍に遭遇した各国のリーダーは、的確な「インテリジェンス」を手にしていなかったゆえに、傷口を広げていきました。いまほど精緻な「インテリジェンス」の必要を痛感させた事態はない。そんな反省から、世界の情報コミュニティではいま、重大なパラダイムシフトが

起きつつあります。強権国家は不都合な真実を隠したがる。それゆえ、情報統制を敷く大国の懐深くに情報のネットワークを張り巡らし、自前のインテリジェンスを入手すべきだ――。私がライフワークとしている情報の世界でも、かつての敵、クレムリンや国際テロ組織に代わって、姿を見せない感染症が「主要な敵」となりつつあります。それに対応して各国の情報機関は、組織、人員、予算の組み換えを行いつつあります。皆さんが暮らす地域、職場、社会のシステムも変貌しつつあるはずです。だとすれば、あるべき技術・社会・経済システムのデザインを責務とするSDM研究科にとっていまこそ出番です。福沢諭吉という変革期の経済・社会の設計者が、いま生きていれば、この困難な課題に必ずやチャレンジしていたことでしょう。それでは当日、オンラインを通じて皆さんにお目にかかるのを楽しみにしています。

外交ジャーナリスト・作家 手嶋龍一

「講師のプロフィール」

87年からNHKのワシントン特派員として、冷戦終結を宣言したマルタ会談に立ち会う。90年の湾岸戦争では最前線へ。94年にハーバード大学CFIA・国際問題研究所でシニア・フェロー。その後、ドイツ支局長を経て、97年からワシントン支局長を8年間務める。この間、2001年の同時多発テロ事件で11日間連続の昼夜中継を担った。05年にNHKから独立し、「日本初のインテリジェンス小説」と評された『ウルトラ・ダラー』を発表。姉妹篇の『スギハラ・サバイバル』と共に50万部を超すベストセラーに。『たそがれゆく日米同盟』、『外交敗戦』、『ブラックスワン降臨』、『汝の名はスパイ、裏切り者、あるいは詐欺師』など著者多数。最新刊は『公安調査庁—情報コミュニティの新たな地殻変動—』（中公新書ラクレ）は、発売後、一週間でベストセラーの総一位にランク入り（朝日新聞）。慶應義塾大学大学院SDM教授として「インテリジェンス戦略論」を担当し、現在は東京理科大学大学院で特別上席教授をつとめ、一線のビジネスマンや官僚などの指導にも熱心に取り組んでいる。